目次

理想の文化と佛教……大智正……本多日生
聖訓摘要……本多日生
佛教より觀たる日本思想の一考察……田久保本誓
佛教讀本を讀む……迂學堂昂生
各地教信……編輯局

第三十年十一月號

教

第十號出づ

本誌執筆家

本多日生
後藤新平
床次竹二郎
永井米藏
岩野直英
高島平三郎
志賀重昂
佐藤鐵太郎

その堂々たる内容

各方面の名家執筆

毎月一日　十一日發行　一部金十錢

東京府荏原郡品川町南品川四一二

發行所　教發行所

（振替東京一〇九四〇番）

蓄音機
レコード

大僧正本多日生師吹込

一、宗教信仰の必要
一、佛教信仰の歸結
一、佛教の卓越せる所以
一、聖語

二枚四組二圓四十錢（多二送料三十錢）

東京市淺草區北清島町一四

取次所　統一閣

本多日生猊下著小册子

（現在品のみです賣切れ絶版になつたものは注文さるゝと餘計な手數で困ります）

自我偈講義　一部金廿錢送料金貳錢
修法勸行の心得　十部金壹圓送料共　一部金十五錢送料貳錢
教育勅語と思想問題　十五部金壹圓送料共　一部金貳拾錢送料金貳錢
十部金壹圓送料共

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引す御照會下さい

理想の文化と宗教

大僧正　本多日生

私は本多日生であります。此度名古屋放送局に於て宗教講座なるものを設けられて、彼岸七日の間、宗教に關するお話を申上げることになつたそうであります。

彼樣な催しが放送局に於て立案されるといふのは、社會の要求が宗教に近づいて來た、その象徴でありまして、放送局の人達が彼樣な考を持たれることは、社會の宗教に對する進歩として、私は慶賀する次第であります。

それに就いては宗教それ自身が社會化して、社會の現實のためになるやうに、もつともつと密接した働きをしなければならぬと思ふのであります。

それで彼岸のお話と申せば古いやうなことを話すのが當り前かも知れませんが、私は今申す社會に密接した宗教として『理想の文化と宗教』と題してお話をしたいと思ふのであります。この講題はあまり大き過ぎて短い放送時間には盡くせないことでありますけれども、只その便概を申上げやうと思ふのであります。

元來文化の向上發達を期するのは人類共同の目的、即ち人類の最高の事業であります。理想の文化を創造し、建設して、文明の惠澤を共にするのは最も大きな最も清い事業であります。

若しも個人の行動でも、團体の行動でも、それが理想の文化を建設する上に於て妨げをなすやうなことがあつたならば、そのことは決してよいことではないのであります。

宗教や國家といふやうな立派なものでも、夫れが理想の文化に逆行する、破壞を與ふるといふことがあれば、其宗教も其國家も呪ふべきものであるかも知れないのであります。夫れ程に理想の文化といふことは、一切の事柄を超越した最高の事業であると云ひ得ると思ふのであります。

ところが凡ゆる事業を爲し遂ぐるには先づ構想圖案理想といふものがなかつたならば、其ことを仕上ぐることは出來ないのであります。例へば家を建てるには、先づ建築に關する繪圖面が出來て、その圖案が出來て、それから夫れに基いていろ〳〵な職工が仕事をして、異れる仕事を集めて家が出來上るのであります。若しも構想圖案がなくして各種の職工が勝手々々の仕事をしたならば、その努力は冗になることが大いであらう。出來あがつた建築は決して立派なものは出來得ないのである。夫れ故に家を建てるには先づ構想圖案があつて、夫れに導かれて各職工が働くのであつて、繪を書くには繪を書く人の頭に矢張り構想圖案が出來て、山水を書くとか、人物をかくとかいふことが、チヤンと頭にえがかれて、それから筆を下すのであつて、初めて立派な繪が出來るのである。何の考へもなく矢鱈に筆を動かしても何も出來るものではないと思ふ。その道理で大きな文化を建設するといふやうなことに就いては、夫れに働く前に先づ以つて整つたる理想を吟味して、彼樣に文化は作り上げたいものといふ模範的理想、完全なる考案があつて、そして其模範理想の下に各種の事業を分擔して働くといふことでなかつたならば、各々違つた考へを以つて勝手〳〵の働きをして居るなれば、それを綜合して理想の文化を作り上げることは出來得ないと思

ふのであります。

この問題を組織立てゝお話するのは容易のことではありませんが、極めて大体について申述べやうと思ふのであります。

それは文化は關して變形を戒めて調節を圖らなければならぬといふことであります。偏つては駄目であります。文化の要素を吟味して各々其時を得せしめ、それが連絡し、協力し、調和を保つて、初めて文化が完成するものであらうと思ふのであります。それは大した學問をしなくともわかることであります。

先づ其變形を戒めて調節を重んずるといふことを深く記憶してかゝるなれば、茲に個人に就ては人格と生活の技能、これを備へなければならぬと思ふのである。社會については精神的文明と物質的文明とを程よく調節して進まなければならぬのであります。國家については正義と威力を備へ進まなければ理想の文化に貢獻することは出來ないと思ひます。

先づ問題を個人と社會と國家といふ三つに考ふるとしても、今申すやうな調節調和といふことを余程重く見なければならないと思ふのであります。

このことを少し說明するならば、個人としては人格を修養しなければ謝じて文化に貢獻することは出來ない。如何に生活の技能を備へて、商工業に從事せしむれば立派な人であつても、人格がない人であるならば、決して理想の文化には役立たないものである。初めは役立つ如く見へるけれども、しまいには害毒を流す人となるのである。人格のない人は不遇に出會へば世を恨み、人を呪ひ、幸運に際すれば惰落する、遂に人生に於ける眞の幸福を味ふことが出來ないのである。彼れが幸福と思ふことは唯肉の享樂に止まる

やうなことになつて、夫れが却つて世を毒することゝなるのであります。

この人格を研いて他面に生活の技能を養ひ、よし人格があつても、何等技藝を持たない、職業を持たない、人は自ら世に立つことが出來ない、從つて文化に益することはないのである。夫れ故に人格と生活の技能、これが個人については忘れることの出來ない點であると思ふ。

然るに現代に於ける多くの人の心得は、生活の技能を磨くことには熱中して、人格の側を輕く見すぎて居るやうに思ふのであります。又社會は物質文明に依つて生産を增加し、肉体的生活に幸福を與へるのは無論大切なことでありますが、同時に精神的文明に依つて幸福を進め、社會の向上を圖らねばならないのであります。音樂のことについて考へても、石炭箱を叩いてどぶろく呑んで跳ねるのも享樂であり、進歩した音樂に依つて樂しみを盡すといふのも同じやうではあるけれども、其處に文化の進歩があるのであります。

殊に人間が眞の幸福を味ふことは精神的文明の進歩が基準を爲すと云つてよからうと思ひます。さうして社會を作つて居る根本の力は、人間そのものが人格的に目醒めて同情の心、慈愛の心、感謝の心、奉仕の心を互ひに交換して相互が同情を持ち、相互が奉仕の精神を以つて初めて世の中は美しく行くのであります。この社會の根本をなす互讓の力を爲すものは、宗教的道德的力に外ならないのであります。若し物質文明のみであつたならば、必然人々は利己心に陷り、我慾私慾が燻んになり、そこに爭鬪掠奪が起る、自他共に不安に陷り危險に陷るのである。最初は我慾の世界は幸福の如く見へるけれども、他も亦我慾の人が出來るから、我慾と我慾の衝突がそこに起り不安危險に陷るのである。

彼樣にして社會の爲めには物質文明のみでは到底その目的を達することが出來ない。故に理想の文化に進んでゆくつもりであるなれば、唯物史觀であるの、パンの問題が重いなどとて、精神の文明を呪ふやうな社會には、決して向上も幸福も來るものではないのであります。又國家について考へますれば、正義の光は輝き、邪を破ぶる力を持たなければならないのであります。若し國家にして正義の光なく、破邪の力を持たなければ價値はないものである。そして正義の力は精神文明の扶殖涵養によつてのみ維持されるのであつて、物質の慾望に駈しる國家であるならば正義を蹂躙することになつて、正邪を履き違へて其力は邪を行ふ力となるかも知れないのであります。夫故に內に國民を統率し、外に文明を貢献しやうとするならば、國家も亦精神の文明と物質の文明とを調節するといふことが一切の仕事の根底になると思ふのであります。

彼樣にして個人にとつては人格と生活の技能、社會に取つては精神文明と物質文明、國家に取つては正義と威力、これらが調和されて發達する處に理想の文化が實現されて來るのであります。

個人に人格なく、社會に精神の文明なく、國家に正義の觀念がなかつたならば、理想の文化は破壞されて仕舞ふのであります。

先づこのことを認めておいて

さて、佛敎はこれに如何なる關係を持つかといふことを考へますと、この總てに對して極めてよき指導を與へ、啓發を與ふるものが佛敎であると思ひます。

佛敎は人格の修養を最も重きに置いたもので、敎祖釋迦牟尼佛が限られた黃金を擲つて、精神の淨土に向

つて高き宗教道德哲學の如き精神の文明を開拓することに盡しましたのは、理想の文化を建設するには人々を人格的に指導しなければならぬといふことを考へました。政治よりも、經濟よりも、軍備よりも、その他百般の施設よりも、人々をよくすることが根本の問題であると考へたのであります。さうして人をよくする第一は人の心にある眞、信仰なるものに導くことがなければならぬのである。修養は枝葉から見ればいろ／＼な議論があるけれども、根本は人の心の靈光を啓發する、明德を明にする、和魂を働かす、佛性を磨くといふ、この人間の心の元に持つて居る光を啓發するに外ならぬのであります。この力は宗教的敬虔の態度より現れるのであります。釋迦牟尼が信仰は菩薩の第一實なりと說いて、七千余卷の經卷に現れて居ります、樣々の道德、實の中に、人々の心におこる信仰、これが第一の實であると申して居るのであります。信一度起れば恰も栴檀の香木を焚いた如く、栴檀の少し許りを火に燒けば三千世界に薰す、人一度信念を起せば信の德は三千大千世界に薰すと說いて、人間の心の誠、信仰程尊いものはないと力說したのであります。故に信仰は德の母となり、智慧の母となり、力の源となり、信仰に依つて智仁勇の三德を兼ね備ふるのであります。信仰は力なり、信仰は光なり、信仰は德の母なり。尙釋迦牟尼は只精神的の訓練のみ說いたのではありません。生活の技能に關して非常に力强く敎へて居るのであります。人間は職業を選んで、夫れに精通をし、熟練し、勤勉し、そして士農工商各々業務に忠實でなければ、生活の安定は來ないといふことを說きまして、多くの人の考へて居るのと違つて、釋迦牟尼は人間生活に關する生活の資源といふことを非常な力を以つて敎へて居るのであります。夫れ故に釋迦牟尼の人格に關する考へ、技能に關する考へは、現代の文明を調節する上に一點の欠陷を見ないのであります。諸君が我邦佛敎渡來

の最初をお考へになつてもわかります。聖德太子の時に佛敎が渡來し、精神文明として、宗敎道德その他の智慧を啓發し、一方には建築繪畫彫刻凡ゆる技術を發達せしめ、植產工業を發達せしめ、社會事業を發達せしめましたことは、我邦の歷史に於て頗る明瞭であります。佛敎は只精神的の無形の信仰のみを敎へたものではありません。有形の生活の方針についても立派な敎へを與へて居るのである。又社會に關しては物質文明を尊重して居ります。產業であるとか政治であるとか生活の資源を非常に重いことに見て居ります。そのことは一切經の中に明瞭に現れて居ることで、生を助くる產業は皆是れ我佛法なりと申して居ります。是法即佛法とも申し、日蓮の言葉にも殖產工業は我宗敎であると說いて居ります。さうして經濟思想に關する敎訓は諸經の中に現れて居ります。我邦佛敎徒が之れを活用し宣傳しないのは我國民のとがであります。佛敎、その精神には佛敎の文明に關する思想は豐富に說かれて居るのであります。又精神文明のことは今更、申すまでもなく、宗敎道德哲學等を敎へ、社會道德については四恩の內に衆生恩を敎へて、人間は人のために何か善根功德を積まなければならぬ、と到る所に說いて居るのであります。人のために善根功德といふことがなかつたならば、人間の社會は成立しないのである。今の世に人各々が權利を主張し、利益を要求し、互ひに爭ひをするものであつたならば、社會は結合を失つて、暗黑に陷るのは當然の歸結であります。尙釋迦は階級緩和のために、彼は國王たるべき身であり乍ら、無產階級の中に立つて鉢をもつて階級打破の運動をされたのであつて、社會に於ける階級の觀念、互ひに爭ふ思想を最も恐ろしいことに考へてゐたのであります。

尙國家に關しては轉輪聖王の理想を持つことである。轉輪聖王は正義と立派な理想を兼ね備へた立派な

王樣である。世界に正義を行ことゝころの理想の王樣を轉輪聖王と申すのであります。彼樣にして釋迦牟尼は國家に關しても非常の理想を敎へて居るのでありますっ この轉輪聖王の思想は一切經の中に極めて明瞭に說かれて居るのであつて、成日本の　皇室の如きは、丁度この正義と威力を重ねた御稜威即ち轉輪聖王の御德があると古來云ひ傳へて居ります。

更らに之等を綱めて理想の文化に導くために一乘の敎へ大乘の敎なるものを說いた。大乘といひ一乘といふことは、先から申す文明の要素を調節して渾然としてその向ふところを明にするのが大乘といふことであります。その必要なるものは各々所を得て政治經濟殖産工業學問宗敎道德、さういふものが各々その分域を守ると同時に連絡を取つて、統一ある文明を作るのを一乘の敎へと申して居るのであります。

日蓮は立正安國を叫び「吹く風、枝を鳴さず雨、土壤をくだかず」と申して居りますが理想の文化を憧れて居るのであります。

佛敎徒は個人の人格を導いてよき家庭、よき社會、よき國家、よき文化を作ることのために努力せらるべきであります。

彼樣にして人間に就いては人格と生活の技能、社會に就いては精神文明、物質文明、國家については正義と力、これを發揚調節して理想の文化を實現するやうに輾轉してゆく所に佛敎の敎があり、使命があり、力があると思ふのであります。

これは最初に申しました通り大きな問題であるからして、ラヂオ放送で其詳細を盡すことは素より望むべからざることばあるが、唯梗概を申したのであります。

聖訓摘要（第六）

大僧正　本多日生

土木殿御返事

これは龍の口御法難の日、『一昨日御書』と題するお手紙を平左工門即ち北條の內管領の役を勤めて居る人に差出され、それが爲に事が起つて片瀨龍の口に引出されて、日蓮聖人頸の座の御法難が起つたのでありますが、その一日隔てゝ九月十四日に土木殿に贈られた御文章であります。これには十二日に御勘氣を蒙つたが、

いままで頸の切れぬこそ本意なく候へ。（遺文錄六八九）

とお書きになつた。最早や身命を法華經に捧げて、この文永八年九月十二日の法難の日には、法華經の爲に討死をする覺悟でお出でなさつたのでありますから、それがあのやうな不思議な感應を受けて、遂に頸を切られずに終つたのでありますが、その事を「頸が切られなかつたので誠に嬉しい」とお書なさらずして、今まで頸の切れぬことが却つて本意無く思ふ、若も過去に法華經の爲に身命を捧げて居つたならば、今日かゝる身では居るまいといふことをお書きになつて、飽く迄も法の爲に身命を捧げる深き決心をお示しになつて居ります。これは唯今京都の本滿寺といふお寺にその御眞筆が現存して居る次第であります。これに龍の口法難の光景が詳しく書いてなかつたといふので、先年重野安釋といふ人が日蓮聖人は頸の座

に坐つたことがないといつて法難を否定したことがありましたが、それはこの文章には法難の事を略して、唯だ「頸の切れぬこそ本意なく候へ」とお書きになつて居るのである。所がその次に四條金吾にお與へになつた御文章は同月二十一日の日附でありますが、その方には頸の座に坐つたことがはつきり書いてあるのであります。學者といふ者は妙な事をいふ者で、自分の見た物になければ無いといふのでありますから、この本滿寺の御消息だけしか見なかつたものであるから、それで龍の口頸の座の法難が無かつたといふ事をいふのであります。それも見なかつたら日蓮聖人は無い人だといふことも言へる譯であります、「自分の見た書物の中には日蓮といふ名前は何處にも出て居らなかつた」といふことになるかも知れぬ。自分が見ないのを以て一切を否定したならば、何もかも無くなつてしまふ譯であります、實に滑稽な間違ひでありますが、御遺文では直ぐその次に四條金吾への御書に斯うあります。

四條金吾殿御消息

度度の御音信申しつくしがたく候、さてもさても去十二日の難のとき、貴邊龍の口までつれさせ給ひ、しかのみならず腹を切らんと仰せられし事こそ不思議とも申すばかりなけれ。（遺文錄六八九）

日蓮聖人の頭が飛んだら一緒に腹を切つて御伴しやうと言つて、四條金吾が龍の口にお伴をして行つたことは、如何にも貴いとお書きになり、續いて斯う仰せられて居る。

日蓮多山にまゐりてまづ四條金吾こそ法華經の御故に日蓮とおなじく腹切らんと申し候なりと申上候べきぞ。（遺文錄六九〇）

日蓮が多山に歸つて佛樣に復命を申上げる時には、「四條金吾は日蓮と同じやうに不惜身命の決心を現はして法華經の爲に命を捨てゝも宜いと龍の口の法難の時に申した者でござる」とのお釋迦樣に申上げやうと思ふとお書きになつて居ります。

五人土籠御書

これは僧侶並に信者併せて五人が土の牢に入れられて居る、それにお遣はしになつたのでありまして、同年十月三日の御書であります。

今月七日佐渡の國へ罷るなり、各各は法華經一部づつ遊ばして候へば、我身竝びに父母兄弟存亡等に回向しましまし候らん、今夜の寒さにつけていよいよ我身より心苦しさ申すばかりなし。（遺文錄六九一）

五人の弟子檀越が土の牢に入れられて、法華經を信じ日蓮に從ふが爲に斯の如き法難を受くるといふことは、如何にも氣の毒に思ふ、功德は廣大であるけれども今夜の寒さにつけては牢の中のことが思ひやられて實に可哀想に思ふとお書きになつて居ります。

轉重輕受法門

この中には、法華經の行者は重き災難を受くべき者も、信心の德に依つて輕く受ける、大病に罹るべき者が僅かな病氣で蹇るとか、死ぬ程の災難を他の僅かな不仕合で免れるとかいふやうに、重きを輕く受けて濟むといふことをお書きになり、尙ほその中に日蓮は個人の解脫――自分が成佛をするばかりでなく、

自分の成佛も大事だけれども、どうか日本の國の前途を見定めたいと思ふとお書きになりました。これは日蓮主義の特色でありまして、宗教は個人解脫の爲だといふことを、強く考へ込んで居る人がありますけれども、それは間違ひである。さういふ宗教を以てそれが宗教の本領だといふ事に決定すればさうなるか知りませぬが、釋迦如來の立てられた佛教は個人の解脫だけを以て決して目的とはなさつて居らない、その法を弘めることに依つて世間を良くし國を良くし、總てを良くするといふ事をお考へになつて居るのである。「それは原始佛教には無いことであらう」といふ事を、屢々聞くのでありますが、決してさうではありません、第一考へて御覽になれば判りますが、釋迦如來の御弟子には國王、大臣の方が澤山あるのである、印度は國が小さく分れて居つて、大きな國が十六あり、小さい國は二百にもなつて居つた位であります、その國王が釋迦如來に歸依をせられて居る、若し國などはどうでも宜いといふやうな事を釋迦如來が說くのであつたならば、國土に決して佛教を信ずるものではない。のみならず釋迦の教の中には「跋祇の國家不衰の七法」といふ事があつて、跋祇といふ國の衰へないやうに、國家は七つの事柄を守つて行かなければならぬと說かれた、それは國民が心を協せて國の爲にしなければならぬとか、國民には道德の觀念宗教の觀念を失はぬやうにしないと、我慾に導いては國が衰へるとか、大事な事が說いてあつて、その七つの事柄を行へば國は衰へないで盛になると言つて、國家の發達する所の教を說かれた。その跋祇の七法といふことは何處にも出て來ることであります、それは唯だ一ケ所の話ではない、『阿含經』の中に於て國家の問題に就ては何時でも出て來ることである。それから又釋迦が何時でも口癖のやうに說いたのは、人間一人も大事であるけれども、一家全体の爲には一人は犧牲にならなければならぬ、自分の都合の爲に家

中のことを忘れてはいかん、家は大事であるけれどもその村の事を忘れてはいけない、村が大事でも國の事を忘れてはいけないといふ順序に始終話をして居る、一身よりは一家、一家よりは一村、一村よりは一國といふ思想は誠に明かに現はれて居る、元々釋迦如來は迦毘羅衛城の王子であつて、刹帝利種即ち政治家の中から出られた人でありますから、唯だ一身の解脫を考へて國家社會を思はぬといふやうな事のあるべき人ではないのであります。さうして常に自ら轉輪聖王を以つて任じ、「我れ出家せざれば轉輪聖王とならん」と言はれた、轉輪聖王といふのは模範的國王が模範的國家を建設するのであるけれども、一國の區域に限られた仕事をするより、どの國家もどの國家も總てが過を取らんやうに、總ての國家を指導する所の教を立てやうといふことを言つたのである、國家を忘れたのではない、總ての國家として過を取らんやうな善き教を與へやうとして起つたものが佛教であります。その思想は大乘諸經に至つては或は「四恩」の說となつて現はれて國王の恩を說き、或は『守護國界經』となつて國家を守護するのが菩薩行の大事な點であるといふことになりして、樣々國家に關する教が佛教の中には現はれて居るのであります。それを古來佛教は國家觀念などは無くして、個人自身さへ解說すればよいと言つて風來人間になつて、商賣も捨てゝしまひ國も忘れてしまつて、ぱつちよ笠かついで漂浪の生活に行くやうな者が佛教だといふやうに思うたけれども、「それは非常な間違ひである、そんな態度で釋迦如來の所に出て來て、「私は商賣は息子に讓つてしまつたし、最早や何も用が無いから毎日のらりくらり何處とはなしに斯うして歩いて居ります、氣樂な者です」と言つて、「佛の所謂解脫脫俗といふことは斯ういふ事でありますか」と言つた時に、釋迦如來は非常にお叱りになつて居る。『阿含經』の中に說かれて居るが、人間が商賣も捨てゝしまひ、女房も子

供もスッぽかしてしまつて、ばつちよ笠かついでフラリ〳〵とあつちの木賃宿に泊り、こつちの橋の下に寝て、乞食みたやうな生活をする者が天下に殖えてどうするか、俺が説く所の解脱、脱俗といふのはさういふことではない、商賈をしながらその商賈の中に正しき信念を持つて商賈をやつて行くのである、我慾に眼が晦んで人を騙して桝目を誤魔化したりするやうなことは、皆慾心が突張る所から出て來るのであるから、さういふことはいかん。政治を執る中にも、商賈をする中にも、その上に解脱、脱俗の精神があつて正しい事が行はれて行くのであるといふことをお説きになつた。丁度日蓮聖人が「宮仕へを法華經と思召せ」といふのと同じ事が釋尊に依つて説かれて居るのである。「釋迦は元々世捨人であつて國や世の中は思はなかつたものを、日蓮が日本人なるが故に國家的色彩を與へたものぢや」といふやうに解釋して居る坊さんが澤山あるけれども、それは怪しからぬ事である。問題が問題である、釋迦の教は非國家的のものであるのに、日蓮が國家主義に迎合して國家的佛教にしたといふやうなことを、坊さんも基督教徒もいふが、それは釋迦の教を知らぬ所の最も不都合な言ひ方である、國家といふことを何故そんな風に卑しむのか私には判らぬ、それは日本の如き國家の團結といふものは、内に外にこの國を通じて眞に偉大なる事業を成し遂げるものである、それを西洋の或る誤れる思想の口眞似をして、國家なんかといふことを云ふのは古いとか低いとかいふやうなことを、眞似をして太鼓を叩くなどといふに於ては、事と品とに依ると私は考へる。日蓮聖人が自分だけの解脱は法華經に依つて保障せられて少しも心配にならぬ、法華經には「一句一偈猶ほ授記を與ふる」とあるが、少くとも日蓮は法華經全部に依り、又法華經の爲めに多少とも御奉公を申したのであるから、自分の成佛は最早や一點疑ひを存する處がない、自分が安心立命になるにつけ

ても思ふは國家の前途であるといふことを言はれた、非常に強く國家の事を思はれて居る。それがこの御文章は言葉は簡單であるけれども非常に宜しいと思ふ。

今日法華經一部よみて候。一句一偈に猶ほ受記を蒙むれり、何に況んや一部をやと、いよ〳〵願もし。但おほけなく國土までとこそ思ひて候へども、我と用ひられぬ世なれば力及ばず。（遺文錄六九四）

日蓮の申上げることをお用ひ下さらぬから、國家の爲にと思ふこの志が通らぬと言つて慨歎をして居られるのであります。

土籠御書

これは『日朗土籠御書』ともいふので、前のは『五人土籠御書』でありましたが、これは日朗上人が一人別に土牢に入れられて居る所に贈られた文章であります、文永八年十月九日の日附でありますが、有名な御遺文であります。

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、今宵の寒きにつけても牢のうちの有樣思ひやられて痛はしくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を色心二法ともに遊ばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をも助け給ふべき御身なり。法華經を餘人のよみ候は口ばかり言葉ばかりは讀めども心に讀まず、心に讀めども身に讀まず、色心二法ともに遊ばされたるこそ貴く候へ。天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害と説かれて候へば別の事はあるべからず、籠をばし出させ給ひ候はば疾く〳〵來り給へ、見たてまつり見えたてまつらん。恐恐謹言、

文永八年辛未十月九日　　日蓮花押

筑後殿

日蓮が法華經の爲に流されることを覺悟の上だから、それは苦みとは思はぬと輕くお書きになつて居る「日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、」自分の事に就いては覺悟をして居るから決して苦みとは思はんけれども、今夜の寒さは普通の家に住んで居つても寒いのに、今土牢の中に入れられて火鉢も無く布團も無く、定めし寒いことであらうと思うて、法華經の故とは言ひながら我が弟子今や土の牢に幽囚されて居るかと思へば、實に心を碎く思ひであるといふことをお書きになり、但し悅ばしいのは人は法華經を口に讀むけれども心に讀まぬ、心に讀んでも身に讀まないが、日蓮の一類は身に之を讀むのである。身に讀むといふのは法華經の爲に盡すことで、法華經は唯だ空な文章が書いてあるのではない、正義の爲に奮鬪を續けて、人を救ひ世を救ひ、國を救ふ所の活動をする敎である、唯だ經文を口で讀んだり、議論を講壇の上で鬪はす所の空言放論して居る宗敎ではない、實際命を捧げて道の爲に國の爲に盡して行くのが法華經の實行的の敎である、それを今汝は土牢に入れられて迫害を忍んで法華經の爲に盡して居られるのだから、是ほど尊いことはない、愈々となれば諸天善神が來つて給使保護をなさる、どのやうな迫害も決して汝を損することは出來まい、毒も害すること能はず、刀も害を加へることは出來まいといふことをお書きになつて、その內に牢から出られたならば佐渡の國に訪ねて來るが宜いといふことを書かれた。始めから終ひまで實に涙の文章であります、日蓮聖人の情操、そのやさしい考へが弟子の上に現はれて居る御遺訓であります。

此經難持十三箇秘訣

これはどういふものですか私にはどうも信ぜられない、「此經難持」の好きな者共の間に斯ういふものが混入したのではないかと思ひますが、別段取出して申上げる程のこともありませぬ。

寺泊御書

これは愈々越後の寺泊にお着きになつて、それから船に乘つて佐渡にお渡りになるに就いて、富木殿から附けられた供人に託して富木播摩守、即ち下總の方にこの手紙を持たしてお返しになつたのであつて、日蓮聖人の佐渡前後といふ大事な區域が茲に付くので、佐渡以前の御書はこの『寺泊御書』が終りになる譯である、さうして今度佐渡ケ島に渡るとスツパリ變つた意味に現はれて來るのであります。何が變つた意味に現はれて來るかと言へば、自ら上行の再誕といふことをはつきり茲にお示しになり、隨つて上行の任務としては本佛を光顯して法華經書最品の正義を現はすといふことになつて、『開目鈔』が現はれて來るのであります。即ちこの十月二十八日に佐渡ケ島に着かれて、十一月の始めから筆を執つて『開目鈔』をお書きになるのである。この『寺泊御書』は十月二十二日の日付になつて居りますが、風の都合で尙ほ暫く寺泊に滯在をしてお居でになつたものと見える、佐渡ケ島へは海の都合さへ好ければ五六時間で渡れる所をば、「十月二十八日に佐渡ケ島に着きぬ」といふことを書かれた他の文章から見ますと、未だ暫く寺泊に滯在をして居られたものと見えます。この始めの所は唯だ寺泊に行かれた光景でありますけれども、記

憶すべき御文章で、

今月十月相州愛京郡依智の郷を起つて武藏の國久目河の宿に着き、十二日を經て越後の國寺泊の津に着きぬ。此れより大海を渡つて佐渡の國に至らんと欲するに、順風定らずして其の期を知らず。道の間の事心も及ぶ莫く又筆にも及ばず、但時に推し度るべし。又本より存知の上なれば始めて歎くべきにあらじと之れを止む。（遺文錄六九七）

と仰せられた通り、最も虐い方法を以つて警固の役人が付いて寺泊に送り屆け、これから船に乘せて佐渡ケ島に流し者にする譯であります。この富木殿に贈られた文章の中に、佐渡前、佐渡後の關係として大事なのは、終りの所に、

日蓮は八十萬億那由他の諸の菩薩の代官として之れを申す。（遺文錄七〇〇）

といふことがあります、八十萬億の菩薩といふことは、『勸持品』の時分に迹化の菩薩といふて、位の低い方の菩薩が法華經の爲に誓ひを立てられた、その迹化の菩薩の名代となつて日蓮が法華經の爲に盡すといふことが書いてある、迹化の菩薩の代官だといふ事を茲ではつきり言はれて居る。それが佐渡に渡ると直ちにひつくり返つて、今度は本化の菩薩の自覺を明かに現はれて來るのであります。

佐渡御勘氣鈔

日蓮は日本國東夷東條安房の國海邊の旃陀羅が子なり、徒らに朽ん身を法華經の御故に捨てまいらせん事、あに石に金をかふるにあらずや、各々歎かせ給ふべからず。（遺文錄七〇二）

この文章は日蓮は卑しい身分に生れたけれども、法華經の爲に一命を捧げるのは石と黃金の取換をするやうなもので、こんな嬉しい事は無い、佐渡ケ島で朽ち果てやうとも決して日蓮は歎きと思はぬといふ決心をお書きになつて居ります。

富木入道殿御返事

これは十一月二十三日富木殿に贈られたのでありますが、前には迹化の菩薩の代官と言つたのが、茲に愈々本化の御自覺をお現はしになるのでありまして、有名なる御遺文であります。

去る十月十日に付られ候ひし入道、寺泊より還へし候し時、法門を書き遣はし候らいき、推量候らむ已に眼前なり。（遺文錄七〇二）

この「推量候らむ已に眼前なり」といふ事が大事な點で、私は迹化の菩薩の代官ちやと書いて上げたけれども、富木殿は法華經の法門も御承知の事ゆゑ、末代には本化の上行が出でて法華經を弘めるのちやといふことは、涌出品、神力品、これ等に依つて明かに御承知のことであらう、さうして日蓮が今まで闘うて來たこと、流されて居ること、頸の座に坐つたこと、いろ〳〵からお考になれば、迹化の代官とは書いたけれども、日蓮は本化上行の再身であらうぞといふことは、既に推量をなされて居るであらうといふ風にお書きになつたのであります。續いて

佛滅後二千二百餘年に月氏漢土日本一閻浮提の内に天親龍樹内鑑冷然外適時宜云々、天台、傳教に粗釋し給へども之れを弘め殘せる一大事の秘法を此の國に初めて之れを弘たは日蓮豈に其の人に非らず

や。（遺文錄七〇一）

「その人」といふのは上行の再身である、日蓮が天台、傳敎も未だ曾て弘めなかつた大事を弘める上からお考へになつても、日蓮が上行の再身といふ譯ではなからうかと仰せられ、尙ほその次には餘程はつきり仰しやつて居る。

日蓮粗之れを勘ふるに、是れ時の然らしむる故なり、經に云く有二四導師一名二上行一云々。（遺文錄七〇三）

上行菩薩の名を取出して來て、この上行菩薩が法華經の本化の菩薩の導師となつて出られるのであるが、それは誰であらうか、暗に日蓮自ら上行なるぞといふことを任じて、茲にこの名をお擧げなさつた譯であります。その次に、

流罪の事痛く歎かせ給ふべからず。（遺文錄七〇三）

左樣な譯で日蓮が上行の再身であり、この法難は勸持品の豫言に應じて、斯の如く或は流され或は頸の座に据られて居るといふことをお考へになれば、法難が取も直さず法華經の敎を身に讀んで居るのであつて、『開目鈔』に所謂「數々の二字いかんがせられ」――勸持品には「數數見擯出」とあるが、若し日蓮が佐渡ケ嶋に流されずば、數々流されるといふ經文が反古になる、それが反古になれば他の法華經に書いてある大事な事、壽量品にある久遠實成の本佛、今も吾等を見て下さつて居る本佛、又如何なる者も法華經に依つては救はれるといふ事柄が疑ひを懷くやうになる。勸持品の二十行の偈を日蓮が一つ殘らず身に讀むことに依つて、成る程法華經は唯の言葉ではない、二千數百年を隔てゝ說き置かれた法華經が今日蓮聖人に依つて一々身に證明をせられたといふ事が判るであらう、それは勸持品の偈として諸君の御承知のことであります。他の場合にも

勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此の國に生れずば殆んど佛は妄語の人。（遺文錄七〇三）

と日蓮聖人は仰しやつた、日蓮は身を以つて法華經を活かし奉り、その活すことに依つて法華經に說いてある本佛の大事も、一切の物の救はれる大事も皆眞實となつて來るといふに就いては、法難は悅びであるといふことをお考へになつて、そこから出て來たお言葉であります。さうして、

勸持品に云く、不輕品に云く。（遺文錄七〇三）

これだけ書いてあつて何も引いてない、それはモウいふ迄も無いことで、富木殿は能く知つてござる。今日でも諸君の中に日蓮主義の研究が多少でも進んで居る人は、別段經文などを擧げなくとも、勸持品に曰く、不輕品に曰くとあれば、それで十分了解が出來る譯であります。さうして、

命に限りあり惜むべからず、遂に顯ふべき者は佛國なり云々。（遺文錄七〇三）

と筆を止めて身命を捧げて法華經の爲に盡す決心を現はしてお居でになるのであります。

秀句十勝鈔

これは傳敎大師が書かれた『秀句十勝』といふ有名な書物で、法華經の秀でたる點十箇條を擧げられて洵に結構な事が書いてありますが、併し傳敎大師の書かれた事の大體を拔き書せられたもので、少しは日蓮聖人のお言葉も入つて居りますけれども、別段に取出して申上げる迄もない、何れも結構な十箇條の法華經の特色、他の敎と比較して法華經の卓越して居る點を傳敎大師が數へられた、その意味合を說明して

あるのであります。

早勝問答

これはいろ〳〵の宗旨との問答の事に就いて、その方法を書いたものでありまして、昔は流行つたけれども、斯ういふ事は餘り感心しないと私は思ひます。餘り思想の進まない時代は、詳しく話をすると却つて判らなくなる人があるから、簡潔明瞭なる早勝問答といふやうな事も宜かつたでせうけれども、今日は最早や斯ういふ方法はいかぬと私は考へる。又日蓮聖人が何時も斯ういふ筆法を用ひられたといふ譯でもない、何かの參考に書かれたものであらうと思ふ、之れを餘り重く視て斯ういふ風が日蓮門下に盛になり、斯樣な學問の方針で行つたならば、日蓮主義の發展は止つてしまふと思ひますから、私は斯ういふことは今日までの遣り方だと思うて居ります。

法華淨土問答鈔

これは淨土宗の所立を大體書かれて、この誤れることが指摘してあります。即ち「捨閉閣抛」と言つて、淨土門が頻りに捨てよ抛てよといふその、斥的の態度に對して、日蓮聖人が批評を書かれたのであります。これは屢々申す單一神教であつて、多くの佛や神の中から阿彌陀如來を一人採つて、他の神や佛との融合といふことを考へない、融合しないにしてもどういう態度に行くかといふその點の研究が積んで居らぬから、『撰擇集』にある捨閉閣抛の四字は確かに批評すべき急所であつて、日蓮聖人の炯眼に依つてこの點が指摘せられたのであります。爾來幾ら論じて見ても是はモウ動かんことになつて居るので、日蓮聖人の鋭鋒當るべからざるものであります。

生死一大事血脈鈔

この中には大事な異體同心の教訓があります。

總じて日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思を爲して、異体同心にして南無妙法蓮華經と唱へ奉る處を生死一大事の血脈とは云ふなり。然かも今日蓮が弘通する處の所詮是なり。若し然らば廣宣流布の大願も叶ふべきものか、剩へ日蓮が弟子の中に異體異心の者これあらば、例せば城者として城を破るが如し。（遺文終七四三）

日蓮の一類は異體同心といつて、身は違つても心を協せて教の爲に盡さなければならない、若し日蓮の門下が分裂して相爭ふやうになつては、丁度城を守る者が城の中から敵に欺を通じて、所謂露探とか獨探といふ者になつて、城の中から城を破る者と同じ事になると仰せられた。今や日蓮主義は各派分裂の狀態でありますが、これは洵に善くないので、前年統合運動といふものが起つて、いろ〳〵教學上の統合をも論議せられて、その事に纏りがついて居るのですけれども、實際に於ては十分に行はれて居らない、或る地方に於ては統合的に活動して居る地方もあるし又さういかぬ所もある、それば洵に慨嘆に堪へないことであります。それならと言つてどうでも斯うでも唯だ一緒にしたら宜いかというと、それはいかんのである、根本の教を明かにして――小さな事はどうでも宜しい、學究的の爭ひは廢めるが宜しいけれども、大

事な點を明かにして、そこに於て異體同心になつて行かなければならぬ。それには本佛に對する思想の如き、佛敎で言へば佛法僧の三寶といふので、この佛に對する觀念が最も大事である、法に就いては法華經が有難いといふことは一致して居るけれども、佛樣に依つてその法の見方が違つて來るのであるから、どうしても佛樣に就ての事が一番大事である。日蓮聖人に對しては モウ日蓮主義は別に議論はない、日蓮聖人を大事にして居る、さうして法は法華經を大事にして居る、唯だ佛樣の事に就いて異論を生じて居る、馬鹿な話である。法華宗はお經は法華經、祖師は日蓮聖人といふことになつて居つて、「それでは佛樣は」というと、そこはちよつと忘れて居る……この位愚なことはない。佛敎は各宗を通じて佛法僧の三寶である、その三寶の認め方に依つてそこに違ひを生じて居るのである、『阿含經』に依つて三寶を認めれば、阿含經とそれから迦葉、阿難等の人々とそれから阿含に現はれたる釋迦牟尼佛といふことになる、大體は釋迦牟尼佛だけれども、釋迦牟尼佛の見方の淺い深いが議論になつて來る。釋迦牟尼佛が有難いと思うて行き居つた時に、其處に阿彌陀如來が出て來るとか藥師如來が出て來た時分には、お釋迦樣が小さくなつて屁古垂れてしまふやうな風に釋迦を見て居る、お釋迦樣と信心して行き居つたけれども、途中で藥師樣に出合つたら大分向ふの方が立派だつたから其方に行つてしまつた、さういふ事になつて居るのが阿含の釋迦牟尼佛である。そこで釋迦牟尼佛を信じて是れを信じ通して、始めより終りまで佛敎徒の釋迦に對する歸依を徹底せしむるといふ所に大事な敎がある、それか爲に『華嚴經』も出來て居る、華嚴經に至つたなれば、何事が現はれて來ても釋迦如來を中心にして一切の活動が現はれて居る、華嚴經に於ては何も他の事はない、釋迦成道の一念を開けば斯の如き偉大なるものであるといふので、華嚴經八十卷は皆それであ

る。阿含經は約二千卷に亘つて居るが、皆釋迦を中心にして居る。佛弟子が各地に傳道して、或は富婁那尊者の說法を聽いて感心して、あゝ有難いと言つて拜まうとすると、富婁那尊者が「マア待つて呉れ、俺はお前達に拜んで貰ふ譯にいかん、吾が師とする所の者汝も亦是れを師とせよ」「あなたのお師匠樣とは誰ですか」「それは釋迦牟尼だ、俺に有難いと云ふ感謝の念が起つたならば、釋迦牟尼にお禮を言へ」皆さう言つて居る。それは何處にも起る現象であつて、富婁那にしても、阿難にしても、舍利弗にしても、迦葉にしても、皆各地に分れて傳道する度毎に大勢の人を敎化すると「有難い」と言つて置きその人に到つて來る、それを「マア待て、佛法の信仰は佛法僧の三寶に歸依すといつて、根本に歸依しなければならぬ佛とは釋迦牟尼佛であるぞ」と言つて居る、阿含經二千卷に亘つて說いてあるのは皆それである。その場合には十方の佛ナンといふものは一人も說いてない、善いも惡いも西にも東にも佛のあるといふことを言はぬ、唯だ過去に七佛あり、未來に彌勒が佛に成るけれども、それは過去の佛は既に涅槃して居るし、彌勒の出現は五十六萬七千萬載遙かなりといふことになつて居る。これはマア不熱心な者であつて「マア〳〵お釋迦樣の時に外れたらその次だ」「その次とは何時だ」というと五十六億七千萬載後だといふ、これでは如何に氣の永い者でもこの次を待つといふ譯には行かんだらう、これは五十六億七千萬載といつても、假に斯ういふ數字を使つてあるだけで、果してそれだけの數かどうか判らぬ、どんな氣の永い者でもそれでは大變だといふ觀念を起させる爲に、五十六億七千萬載遙かなりと說いたのである。それはどうしても釋迦の敎に依らなければならぬといふ歸依の心を決定せしめる目的ぢやといふことに見たら宜からうと思ふ、「五十六億七千萬載と言つても、それからモウ二千年經つて居るから大分近くなつて居りますよ」といふや

うな問題ではなからうと思ふ。それから權大乘諸經に來ても、十方に佛があるけれども、この娑婆世界の衆生の爲には釋迦牟尼佛だといふことを何處でも決定してある、これは空間の廣がりに於て十方に佛があつても、我が娑婆世界には釋迦牟尼佛を本師とし教主とし、娑婆世界の衆生は釋尊に依つて救はれるといふことは、何れのお經にもあることで、『悲華經』を讀んでも澤山の佛があつて皆娑婆世界を捨てて他の淨土を取られたけれども、釋迦如來だけはこの娑婆世界の衆生が一番罪が深いといふならばそれを救はうといふので其處に出て來るとか、或は法華經の化城諭品に於ても十六王子の中の釋迦牟尼が娑婆世界に緣あつて出て來たとかいふやうに、何處でも娑婆世界は釋迦は緣有りといふことを說いて居る。論より證據、釋迦牟尼佛として現にこの娑婆世界に出て來て居るぢやないか、出て居る者が緣が無くて出て來ない者が緣が有るといふやうなことは云へないことで、事實は誣ふべからざるものである。一緒に夫婦になつて居りながら、「お前とは緣が無いので俺は何處の蠢妓の方に緣が有る」といふやうな事を言つても、それを見た事もなければ會つた事も無い、唯だ「大變良い蠢妓でそれに俺は緣が有るんだ」と言つて見た所が、夢みたやうなことぢやないか、この娑婆世界に釋迦牟尼佛として出て、人類の文明に偉大なる斯の如き佛教の感化を遺して呉れたこの釋迦牟尼佛に對して緣が無いといふやうなことをいふたならば、それは實に愚論と言はなければならぬ。それでも判らぬといふことになれば、最早や何事も判らなくなつてしまふ、事實手に握つて居るものが自分に判らぬといふことになれば、知覺を失つて痺れてしまつて居るのだから、迚も問題にならぬ。さういふ譯で權大乘諸經に於ても十方に佛ありと雖も、娑婆世界の衆生は釋迦牟尼佛に緣厚しといふことを說いた。それから法華經に至つては、時間に於ても空間に於ても中心として說いた釋迦を今度は絕對に說いて來て、時間に於ては始め無く終り無く釋迦牟尼佛は存在して居る、過去の七佛などと言つてもそれは釋迦如來の活動の一部である、未來の彌勒も何もあつたものではない、久遠より常住にして滅せず、未來も亦常住にして滅せず、この釋迦牟尼佛の大化導なるぞといふことを壽量品に於て說いた、他に幾ら佛があつてもそれは皆釋迦の分身なるぞと言つて、寶塔品の時分には「三變土田」と申して、二百萬億那由佗阿僧祇の國を擴げて十方の諸佛を入れたけれども、未だ足らぬといふので、更に二百萬億那由佗阿僧祇の國を擴げて入れたけれども未だ足らぬといふので、更に又それを擴げて諸佛を迎へて、三遍各々二百萬億那由佗阿僧祇の廣き國界を展開して諸佛を集めた、その集まれる諸佛は皆一同に掌を合して、「今法華經を說きつゝある釋迦牟尼佛に對して、「この多くの吾々は皆あなたの身を分けて働いて居る佛に相違御座なく候也」といふ證明をした譯である。その意味で未だ足らんといふので段々進んで壽量品に至つて眞に絕對の顯本といふことを說いたものである。佛教信者でありながら神や佛の間の聯結といふものを知らないで、佛といつたら一人々々別な者だと思つて居るこの思想が大體非常な間違ひナンである、この間の聯結を見ることが佛教の思想である、神や佛が孤立的のもので阿彌陀如來と言へばこれ一人、藥師如來と言へばそれ一人といふやうに限つて孤立的に見るといふ思想は、佛教には許されて居らぬ。佛教の學問をして御覽なさい、菩薩でも初住菩薩といつて、先づその菩薩の位の中に入つた所の者は、一番低い所が百に身を分けて働くやうになつたのがその位に入つたといふことになる、その身を分けて活動することの出來ない、一つは一つといふ間は、佛教では皆之れは凡夫といふことになる。それであるから觀音樣でも三十三身に身を分けるといふ、三十三身といふけれどもこれは三十三だけではない、女にも出れば

軍人にも出れば子供にも現はれる、それが三十三通りあるので、同じ女にしても年寄にも出れば若い者にも出る、美人にもなれば醜婦にもなるといふ譯であるから、幾らにでも現はれる譯である。それは皆樣が菩薩にも現はれるのであるから、之れを顯本して本佛の活動といふ、一月萬影と稱して、一つの天の月が萬水に影を宿すといふのである、萬水とは何かといふと、例へば畑の芋の葉なら芋の葉に露が溜れば、一町歩二町歩の畑の葉の數でも何千あるか何萬あるか判らん、その芋の葉の一つ〳〵に皆月が宿るのである、芋の葉ばかりではない、瀧の水が岩にぶつかつてバッと飛び散る、その飛沫の一つ〳〵に月影が皆宿る、けれども又集つて一つの流となる時には月も一つしかなくなる。何萬といふ芋の葉の露に宿つた月も、風が吹いてバラ〳〵と露が地に落ちてしまへば一つの月もなくなる、それを見て「さあお月樣は何處へ行つた」と言うて泣いて居る者は馬鹿者だといふのである。それは本佛が或は現はれ或は隱れることに於ては實に自由自在であるといふ、佛の作用である、これか眞の全智全能である。基督の神樣のやうに一つになつてしまつて何處にも出られたい、窮窟千萬な神樣ならば、全智全能ではない不智不能ぢや。それは佛敎の思想としては、善かれ惡しかれさういふ觀念は共通して居るものである、宗派の如何を問はず、佛學をやればさういふ觀念といふものは何處でも認めるものである、それを完成して來たのが、釋迦牟尼を中心にして過去に未來に十方に絕對統一を現はして來たものである。故に異體同心といふに就ては、さういふ大事な佛法僧の三寶の佛の見方を第一決めることが出來ないで、唯だ一緒にならうと言つても默目ぢや。私は他の事は大した事はないと思ふ、日本で言へば皇室を中心にして集るといふことは出來る、けれどもその根本の大事な所を明かにせずしては、異體同心といふ譯にはいかん、敎育勅語にある通り「億兆心を一にして世々厥の美を濟す」といふ、その億兆一心になるといふものは、皇室を中心にして「克く忠に克く孝に」といふことで、心を一にすることが出來るのである。法華經の信者が絕對本佛に對する信念がグラついて、さうして共同一致しやうと言つた所がそれは駄目なことである、その意味が日蓮主義者に徹底しないといふことは、眞に慨嘆に堪えないことであります。けれどもその內に判つて參りませう、眞理は最後の勝利であつて、斯の如き自明なる眞理を爭ふことは出來ませんから、その內に必ずや迷ひを醒す時もあらうと思ひますが、この異體同心の聖訓を拜するに就ては、洵に嘆はしく感する次第であります。前年統合事業を計畫しました私としては、一言申し添へて置かなければならぬから、斯樣なことを申たのであります。

草木成佛口決

この中にも洵に結構な事が出て居ります。

一念三千の法門を振濯ぎたてたるは大曼荼羅なり、當世の習ひ損ひの學者ゆめにも知らざる法門なり。天台、妙樂、傳敎內には鑑みさせ給へども弘め給はず、一色一香とのゝしり惑耳驚心とさゝやき給ひて、妙法蓮華と云ふべきを、圓頓止觀とかでさせ給ひき。（遺文錄七四六）

この聖訓は洵に大事なことで、一念三千の法門をいふのは非常な哲學的の大組織で、天台大師が『摩訶止觀』の中に詳しく書かれたことである、モウ佛敎の敎理史に於てはこの一念三千に越すものはないと言はれて居る、この間も或る地方に行つたら、いろ〳〵調べて居る人があつて、日蓮主義者には未だなつて

居らぬけれども、その人が名刺に書いて私の所に屈けて來た、それは「何と言つても一念三千の法門には東西古今の學者兜を脱がねばならぬ」といふことを書いてあつた、私は知らぬ人だけれども、隨分田舍の邊鄙な所にもいろ〳〵調べて居る人もあるものだと思うて感心した。一念三千の法門は實に完全なる思想の現はれでありますが、併しこれが哲學風の思想としては中々面倒な事で、屢々一念三千の學說を聽いても容易に判らぬ位なことになつて居ります。それを今日蓮聖人が言はれるので、その一念三千の法門を振り灌き立てるといふことはどういふ事であるか、振灌〻といふのは汚れた物を洗濯することである、一念三千の法門に垢が着いたり汚泥が着いたりして居るのを、すつかり洗つて振り出して、さうして善い所を殘すと今日蓮の顯はしたるこの御本尊となつて現はれて來るのである。一念三千の議論をただ理窟をペンの先で捏ね廻はして、覺えたやうな覺えないやうな事に引つかゝつて居るのは、これは煩瑣な學究に陷つた佛敎の弊害である、即ち穢れである。その汚點を振り灌ぎたてゝ、佛敎は哲學ではない、眞理の敎ではあるけれども宗敎を以つて目的としたものである、一今三千の敎と雖もモウ一段進めてそれを信仰に導かなければならぬ。「一念三千のやうな敎は、面倒だからそつちに退けてしまつて、こつちは唯だ盲目的のお有難主義で行かう」といふのはいけない、一念三千の敎に引つかゝつて信仰に入ることが出來ないでマゴついて居るのもいかんから、この一念三千の哲理の組織立つたものを振り灌ぎたてゝ、さうして宗敎の信仰に進んで行かなければならぬ。哲學に基礎を置いて、哲學を敵視せずして、その理智を履へてその上に建設したる宗敎の信仰ぢやといふのが「一念三千の法門を振灌ぎたてたるは大曼荼羅なり」といふ事である。さうしてこれは當世の習ひ損ひの學者の夢にも知らざる法門なりと言はれて、日蓮聖人の確信を述べられたのであります。

開目鈔

次は有名なる『開目鈔』上下二卷でありますが、これは『聖訓要義』の講述の際に詳細を申したことでありますから略します。

阿佛房御書

この中には特に取出して御紹介するだけのこともありませぬ。

佐渡御書

この中には日蓮聖人の非常な決心を言ひ現はされて居ると思ひます。

畜生の心は弱きをおどし強きをおそる、當世の學者等は畜生の如し、智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる、諛臣と申すは是れなり。强敵を伏して始めて力士を知る、惡王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は、師子王の如くなる心を持てる者必ず佛に成るべし。例せば日蓮が如し、これ懦れるにはあらず正法を惜む心の强盛なるべし、懦る者は必ず强敵に値ひて恐るゝ心出來するなり。例せば修羅の懦り帝釋に責められて、無熱池の蓮の中に小身と成つて隱れしが如し。（遺文錄八二八）

これは權力と結んで讒言をして日蓮聖人を迫害したに就いて斯ういふことを書かれたので、畜生といふ

ものは犬を御覽になつても、弱い犬が來ればウーッと云つて之を虐めて逐ひ拂つて、彼が食つて居つた肴を横取してしまふ、併し強い犬が來ると忽ち尾を卷いてキャン／／と逃げる、人間も正義不正義といふことに依らずして、強弱に依つて弱きを侮るといふことほど淺間敷きことはない、それは畜生である。然るに當世の學者は宗教の正邪を論爭することが出來ずして、所謂北條の權力に結んで讒言をして日蓮を鎌の座に据えたり、流し者にしたりするのは、能く畜生の心を現はして居るものであるといふことを書かれた。併ながら左樣な者が多い時代に於ては、それに對抗するだけの考を有たなければならぬから、唯だ正義が何等の威力を持たずしてヒョロ／／になつて正義を唱へて居るのでは、この烈しい世の中に正しき教を弘めることは出來ない、穩かなる正義の主張に於てそれが受入られるならば宜いけれども、假令正義と雖も暴力の壓迫に依つて押龍められる時代であるならば、獅子王が百獸の中に恐れを懷かざるが如き奮鬪的の考、剛勇果敢の決心を以つて正義に盡さなければならぬ。さうしなければ佛には成れぬぞ、その實例には他の者を引くことはない、日蓮が即ちその手本である。これは傲慢の爲にいふのでもなければ、手前味噌の爲にいふのでもない、兎角誤魔化しの議論をする者があつて、日蓮がさういふ事をいふのは傲慢だとか惡口だとかいふけれども、東西古今正義を主張する所の人に、これと同一の筆法で言うて居らぬ者はあるまい。釋迦が印度に佛教を開いた時にも、これと同じ事を言つて、我が佛弟子は皆勇猛果敢の精神を持たなければならぬ、恰も敵と戰ふに、敵は十萬味方は一人しか居ない、それでは迚も戰ふことは出來ぬといふので、敵の優勢なるが爲に恐れを懷いて進むことの出來ない者は、無論我が弟子ではない。途中まで進み行つたけれども、近付くに從つて益々敵が優勢だといふので恐れを懷いて、中途にして引返す者も我

が弟子ではない。敵陣に突入して遂に敵軍の爲に斬殺されてしまつた者は、その勇氣は實すべきであるけれども、未だ以つて我が弟子とするに足らぬ。敵十萬の中に突入して、十萬を倒して凱歌を奏する者にして以つて我が弟子たることを得んといふことを釋迦は說いた。そんな十萬人の中に飛込んで凱歌を奏するやうなことが出來るかといふに、それは出來る、思想の戰ひであるから、十萬人の人間が住んで居る所に布教に行くといふやうなもので、始めは迫害をしたり惡口したりするけれども、段々宣傳をして行つて遂に十萬人を悉く斬り從へて皆佛教徒にして來るといふことも出來るから、敵十萬と雖も一人にして之れを斬り從へて凱歌を奏しなければならぬと說いてある。本當の正義の者は必ず勇氣を說く、日本の建國の時にもやはり日本の神樣は正義であるけれども、併ながら餓をお傳へになり、さうして勇氣を以つてこの正義を守らんければならぬといふことをお教へになつた。或る宗教であるとか或る思想家が單に正義を文弱的に說き、宗教を文弱說に說いて、力ある奮鬪の精神を罵ることがあつたならば、それは全く昔でいふたら腐儒である。正義といふものを擁護するには必ず力が伴はなければならぬ。今後思想が荒らいで來て惡いものが蔓る時分に、唯だ生ぬるいことを言つて居るやうな宗教や道德や思想は、悉く遂ひ捲られてしまふ、所謂日蓮が茲に呼んだが如く　世の中が狂暴になつて來た時に於ては、正義を主張する者は命懸けで獅子王の如き勇氣を以つて奮鬪しなければならぬ、これが今後の日本に役立つて來るのである。「お前の宗旨は何だ」と聞かれた時に、口の中でモグ／／して「法華を信心して居るやうなものですけれども、マアちよつと序でに行くだけで……」といふやうなことを言つて、始めから弱い犬が尾を捲いてかゝるやうなことでどうして、思想の戰ひに進軍することが出來るか。「自分は法華經の行者である、不肖ながら他の事

はあかんが信仰の一點には人に讓らん積りぢや」といふやうに、慢心はいかんけれども、鞏固なる信念を持つて行かなければならぬから、それを日蓮聖人は言ふのである。さうして決してこれは懲つて左樣なことを言ふのではないといつて　懲つて居る者が眞の確信かといふことの違ひ目を茲に日蓮聖人が說いて居る、眞に勇氣ある者は正法を知り正義を愛する精神の爲にこの勇氣を鼓舞するのである、卑しい精神から起る者であつたならば、强い敵に出會つた時に恐れを懷く、例へば修羅が懲つて居つたけれども、帝釋天に責められて無熱池といふ池の蓮の中に小さく隱れて慄へ上つて居つたやうなものであつて、本當の勇氣でないものは敵が强い場合に恐れを懷く。併し日蓮は如何なる强敵に出會うても曾て恐れを懷いたことはない、これは正義を以つて鍛うた勇氣であるが故であると言はれた。日蓮主義者でも僅かな事でビク〳〵するのは、やはり道を愛する精神、道を信ずる精神が鞏固でないから、何か我儘で信心して居るやうに思ふし、その議論を自分の私見より論ずるやうに思ふから、批評でもされると顏を眞赤にしたり、ヘナ〳〵したりするのぢや。我は佛の正法を擁護し、聖使日蓮の才命を賭して鬪つた道を守る正義に立つて居ると信じたならば、何も恐れる所はない、それを日蓮聖人が言はれた。續いて斯ういふことに就ては、幾ら澤山書物を讀んでも膽玉が出來て居らんければ駄目だといふことを書かれた。

正法は一字一句なれども時機に叶ひぬれば必ず得道成るべし、千經萬論を習學すれども時機に相違すれば叶ふべからず。（遺文錄八二九）

唯だ書物ばかり讀んだからといつて、時代を理解せずして、その時代の必要に應じたる活動を起さぬやうな宗敎は駄目だといふことを論結せられた。それからモウ一箇處この文章の中で結構な所は、

日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出でたり、心こそすこし法華經を信じたる樣なれども、身は人身に似て畜身なり、魚鳥と混丸して赤白二滯とせり其の中に識神をやどす、濁水に月のうつれるが如し、糞囊に金を包めるなるべし。心は法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶ほ恐しと思はず、身は畜生の身なり、色心不相應の故に愚者のあなづる道理なり、心も又身に對すれば濁水月映にも譬ふれ、又過去の謗法を案ずるに誰か知る。勝意比丘が魂ひにもや大天が魂にもや、不輕輕毀の流類なるが失心の餘殘なるか、五千上慢の眷屬なるか大通第三の餘流にもやあるらん、宿業はかりがたし。鐵は炎打れば劍となる、賢聖は罵詈して試みるなるべし。（遺文錄八三一）

とお書きになつた、これが非常に良く出來て居ると思ふ、反對の者は日蓮聖人が旃陀羅の家より出たと言つたが爲に、穢多の子であるなどと言つて嘲つて居るけれども、これはさういふ意味ではない、旃陀羅といふのは聖人の親が漁をして居られたからそれを旃陀羅と言はれたので、日蓮聖人の血統を言へば決して穢多の子といふやうなものではない。貫名重忠の家系といふものは明かになつて居るので、元は遠州の相當の領主で、侍の中に於ても小さな城を領して居つた一個の領主であつた、母の梅菊といふのも京都の方から來られたので、清和天皇の血を引いて居られるといふ位に家筋の正しい事は歷史が證明して居るのである。けれども茲に斯う言はれたのは、宗敎の尊さを說明して居るので、この肉体といふ物は誰でも皆親が魚を食つたり鳥を食つたりして出來た所の物である、肉体を以つて論じたならばこの肉身といふ物は如何にも卑しい物であるといふことを論じたので、人間は心に於いて價値がある、身体だけを以つて言うたならば恰も濁つた水に月の映つて居るやうなものである、この肉体が尊いといふことはどうしても言へ

ない、唯だ血統を承けると言つても、要するにその精神が尊いのであるといふことを論ぜられた。さうして日蓮は法華經を信ずるが故に梵天帝釋をも尙ほ恐ろしと思はぬ。身体は魚鳥を混丸して成せる身なるが故に洵に淺間しいものである、これは人間全部をいふのであつて、自分ばかりではない、父母が和合して肉身を生ずるといふことは、何もそんなに淨いものではないけれども、その中にある心が人間の尊い所である、その心が正しき敎に向ひさへした時には、この上も無い立派な者になるといふことを說いて、さうして身と心の關係をお示しになつた。之れを或る低い者が宗敎家でありながら唯だ血統などを重んじて、心は腐れ果てゝ何も判らぬやうになつて、唯だ血統がどうだ斯うだといふやうな事を言うて居るのは間違つて居る。それは日本の國体の如きことは血統を重んずるのであるし、世間の家でいへば血統を重んずるのが大事であるけれども、宗敎に來りながら血筋ばかりえらいと言つて、敎などは構はぬといふやうな料簡になつたならば、實に淺間しい考と言はなければならぬ。

富木殿御返事

これは別段取出して申すこともない。

最蓮房御返事

この中には有名な一歩を歩ますして多山に往復するといふことを書かれた結構な御文章があります、その點をざつと御紹介しやうと思ふ。

是の如く思ひつゞけ候へば、我等は流人なれども身心共にうれしく候也。大事の法門をば晝夜に沙汰し成佛の理をば時々刻々にあぢはう、是の如く過ぎ行き候へば年月を送れども久しからず、過る時刻も程あらず、例せば釋迦多寶の二佛塔中に竝座して法華の妙理をうなづき合ひ給ひし時、五十小劫佛の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂はしむと云ひしが如くなり。劫初より以來父母主君等の御勸氣を蒙り、遠國の島に流罪せらるゝの人、我等が如く悅び身に餘りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乘を修行せし處は、何れの處にても候へ常寂光の都爲るべし、我等が弟子檀那とならん人は、一歩を行かずして天竺の多山を見、本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしとも申す計り無し、申す計り無し。餘りにうれしく候へば契約一つ申し候はん、貴邊の御勸氣疾々許させ給ひて都へ御上り候はゞ、日蓮も鎌倉殿は許さじとの給ひ候へども、諸天等に申して鎌倉に歸り、京都へ音信申すべく候、又日蓮先立つて許り候て鎌倉へ歸り候はゞ貴邊をも天に申して古京へ歸へし奉るべく候、恐恐謹言。（遺文錄八四一）

これに前に申す通り、法の爲に晝す身には迫害は恐るゝに足らぬとお書きになつて、身を以つて法華經を證明すると考へれば心身ともに嬉しく思ふと言はれた。即ちこの流し者になることに依つて法華經が活きて來るのである、他の御文章にもありますが、『現在眼前の證據あらんず、時この經を說かば信ずる人もありぬべし』で、唯だ理論や何かでは人の心が却々動かぬ、口で幾ら議論をしたからと言つても「それはさうも言へるし斯うも言へる」といふやうなことになるけれども、日蓮が頸の座に坐り或は雪の中に閉籠められても法華經の爲に晝す心は失はずに、「臭き首を法華經に捧げて金色の如來となるは石を金にかゆる

如し」……此處で言はんければ世間の煩惱に酔ばらつて居る人々を救ふことが出來ない、この雪の中に閉ぢ込められて、寒風凜烈肌を劈く佐渡ケ嶋に於て血涙を搾つて言ふから、初めて精神の痺れきつた中風みたやうな人間も「成る程」となつて來る。それ故にこの日蓮の辛苦が人を敎へる力かと思へば、日蓮の身体は八裂にされても、これに依つて煩惱ふかき人が救はれるのであると考へて見れば悅であると言はれて居る。斯の如く思ひ續けて行けば、この日蓮の辛い目に遭へば遭ふだけ、五慾の煩惱の奴となり、痺れきつた人達の心に清き信念が與へられると考へれば、こんな悅びはない、自分の身は今流人となつて佐渡ケ嶋の雪の中に居るけれども、身も心も浮き立つやうに悅ばしく思ふ。さうして法華經の有難い敎の事を夜も晝も話し合ひ、又自分が佛に成り得るといふこの決心はモウ定まつた「成佛の理を時々刻々に味ふ」といふので、成佛してから悅ぶのではない、寒い風が隙間から入つて來てヒューッと吹く、如何にも寒い、寒いけれども自分の成佛は最早や定められて居るのだから、この寒さに凍えて死んでもその先きは直ちに佛に繫がれて居ると思ふが故に　時々刻々と辛さにつけても悅びなり、嬉きにつけても悅びなりで「成佛の理をば時々刻々に味はふ」と言はれた所が如何にも尊い所である、そこに行かなければならぬ。宗敎の成佛ナンといふものは死んだ先きのことぢやと思うて、これを遠い所に考へて居ると、愈々死際になつて「これは堪らぬ」と言ふことになる、さうでなくして、現在から既に成佛の事を保證されて居るから、その安心立命の上に總ての事が凌いで行かれるので、それが光となり、憂を打掃ふ力となるのである、この成佛の理を時々刻々に味はふといふことは非常に善い敎訓であると思ふ。

斯ういふやうにして暮して居れば、この寒い〳〵佐渡ケ嶋に居て、實に一日を送るのも容易でないように人は思ふけれども、日蓮は心に悅びを有つて居るから、何時歳が經つたか月日が過ぎたか判らぬ位に思ふ。世界始つて以來流し者にあつた者は多からうけれども、日蓮のやうに悅びに滿ちて居る者はよもあるまいと言はれた、これが如何にも宗敎の精神生活の力が現はれて居る點である。精神生活にはいろ〳〵のものがある、極く低い所で言へば謠曲をやるのも精神生活、碁を打つのも、釣をするのも一種の精神生活であるけれども、宗敎の敎はさういふことゝは違つて、精神生活の中軸となり、精神生活の最高の光を顯はすものでありますから、流し者になつて居つても悅び身に餘ると仰しやつて居らつしやる。それ故にこの信念に居る者は、何處に行かなくてもこの流し者の儘で、塚原三昧堂の詫しき住居の中の其處に淨土があるのである。日蓮の弟子檀那となつた人々は、この信念を失ひさへしなければ、一歩を歩まずして天竺の多山を見、本有の寂光土に晝夜に往復することが出來ると思へば、如何にも嬉しいことである。さうして餘りに嬉しく思ふから一つお約束を致さうと言はれた、これが日蓮聖人のえゝ所です、鎌倉に於ては非常に日蓮を惡んで居るから、假令千尋の海の底の石は浮ぶことがあらうとも、日蓮は生きて鎌倉に還すべからずと言つて居る、千尋も深い海の底の大きな石が假に海の上に浮び上るやうなことがあらうとも、日蓮ばかりは生かして鎌倉に再び還さんぞと言つて居つた、それに向つて日蓮は、假令鎌倉殿は日蓮を生かして還さんと言つても、日蓮は必ず生きて鎌倉に歸つて見せるがどうぢやといふ、これは實に愉快な所である。そこで日蓮聖人が、餘り嬉しいから一つあなたとお約束をしやう、鎌倉殿は許さぬと言つても諸天善神に申上げて日蓮は必ず鎌倉に歸つて見せる、之れを一つ賭をしやうといふ事をお書きになつた、果せる哉、日蓮聖人が佐渡ケ嶋にお出でになつた爲に、段々佐渡にも信者が出來るやうなことになつたので、

大勢の佐渡の坊さんが寄合つて、これはどうも困る、殺してしまふならば早く殺して貰ひたい、殺すことが出來ぬならば鎌倉に伴れて歸つて貰ひたいものだ、斯ういふ者を置いて貰つては段々吾々の檀家も奪られてしまひ、信者も無くなつて飯の食上げぢや、大變な者を流されたものぢやといふので、佐渡の坊さんが皆一緒になつて鎌倉の方に、日蓮を殺して貰ひたい、殺すことが出來んならば引取つて貰ひたいといふ事を言うて來た。そこで鎌倉ではモウ放任つて忘れたが如くなつて居つたけれども、さういふ新しい訴を得てそれを詮議して、殺さうか還さうかといふことになつた、所が別段殺す程のこともない、のみならず蒙古の襲來のことは段々迫つて來て居る、彼は前年より蒙古襲來のことに就いては非常に憂へて居つたから、これは國家の大事であるから日蓮を喚び戻して彼の意見を聽からぢやないかといふことになつて、そこで俄かに事が決つて、日蓮を殺して呉れといふ督促の爲に、再び日蓮聖人は生きて鎌倉に歸ることに相成るのであります。洵に日蓮聖人の一代といふものは、唯だ一種の宗教家の履歴ではない、吾々が正義を屢んで、闘ふ時分の模範者として、非常に立派な態度をお示しになつて居る、今日の日本の思想界の事に就いても、是から將來の事に就いても、日蓮聖人に學ぶべき點が多々あらうと私は考へるのであります。

大僧正
本多日生師著
本尊論
定價 布製一部 金七十錢 送料金四錢
發行所 立正結社
賣捌所 名古屋市東區田代町常樂寺内 統一編輯局 振替名古屋一〇八一番

佛教より觀たる日本思想の一考察

田久保本誓

一

叙述の順序として我が國へ佛教の傳來した當初の狀態より述べよう。初期の佛教はその原始的な、そして外面的なものであつた事は顯著な事實であつて、欽明天皇の十三年百濟より佛像經卷を朝廷に献するや、それを納るべきか否かに就て、蘇我氏は即ち佛像の相貌端嚴にして且つ外國に於ても信奉するが故に我が國に於ても信奉すべきであると云ふ理由の下に之を納れた。

そしてその後國民の佛教に對する態度は一にその發展に過ぎないのであつた、いはば當時の佛教は外國佛教の形式的模倣である。寺を建て僧尼を度し、佛像を禮拜し經典を誦唱するのが主であり、教儀に對する學解や儀式の説明は全く無用であつた。この佛教の外面的傾向は、その外面的象徴であるところの寺院の上に現はれて著しい發達を來した。佛像や堂塔や彫刻繪畫が直ちに燦然たる佛教美術となるまでに發達したのを見ても知られるのである。

初め蘇我稲目がその向原の邸宅を、佛寺に充てた時分はさしたる壯麗もなかつたであらうが、その後百濟より建築、鑄造、彫刻、繪畫等の諸工が來朝してからと云ふものは、寺院は次第に宏壯華麗を呈するやうになつた。歴史に最も早く見えてゐるものは推古天皇の朝、難波に四天王寺を造てられたのがある。四天王寺は聖德太子が田園十八萬六千八百九十代（一代は五歩又は七歩二）を施入して建立せられ

たと云ふから、大分宏壯なものであつたらう。扶桑略記によると聖德太子の建立にかゝるものは九ケ寺に達してゐる。

聖武天皇の天平時代は佛敎は冲天の勢を以て興隆し、君も臣も萬事を抛つてこれに力を注ぎ、彼の有名な盧舍那大佛の如き大事業を遂行した。これは時人の佛敎に對する態度を示すもので、ここに外面的形式の佛敎はその頂點に達したのである。

二

こうした傾向を佛敎敎理上より如何に觀るか、佛陀はその滅後を三期に分けられた。正法、像法、末法の三である。佛滅後の一千年を正法、次の一千年を像法、最后萬年を末法と配され各時代それ〴〵に特色づけられた人間の機根と、それに對應する敎法の種類も分明に割り當てられて居る。

正法千年を過ぎて像法時代に入れば佛在世から一層緣遠くもなり、信仰も薄らぎ機根も低下し證悟も微弱となり、修行はあつても專ら形式に走り、堂塔伽藍の建立をし辛くも慰安修福を得る時代である。我が國傳來の初期佛敎を見る時此の佛陀の時代判によくはまる樣である。しかし外面的の完成は必ずしも內面的の完成を意味しない、時代が降り世が複雜になれば人心の求めるところも亦複雜となり、思想的空疎の物足らなさを感ずるやうになるのである。その物足らなさを滿さんが爲に佛敎思想は如何に思想界に活躍したか？極めて內觀的な佛敎の思想は、從來の國民生活とは頗る抵觸するものがあつた。

三

我が國從來の國民思想は現實の世界によつて人間の本性に絕對の意義と、無上の價値を與へ人生の行動に他に比類のない、偉大と嚴肅とを附して此の世の不幸を單純に滅ぼす事が出來た。

國民がこうした在來の日本思想に生きて何事もなかつた日は、現實が全生活を擴充してゐるのである

から何等の苦痛も起らなかつた、が一度事ある日に際會して思ひを巡らし、自らを省る時には空虛の淋しさに堪へ難く感じた事であらう。現實をこの上もなく熱愛した日本思想には非常によい、正しいところも有つて居るが人生は必ずしもそれで盡きたと云ふわけでない。平安な生活にも波瀾は起り得る。

わけて平安朝の末になつて、保元、平治の大亂が相次いで起つた。而して源平の武人が此の大亂に目を覺され、其の實力を自覺して振ひ起つたが、平家が先づ源氏を壓して二十年の榮華を夢見次いで源氏が平家を滅ぼし、幕府が鎌倉に立てられて、ここに將軍政治が起り武人の生活が長く社會の表舞臺を飾る事となつた。此の戰亂を中心にして、王朝から武家時代への過渡期に起つた悲劇、源平興亡の光景を見せつけられた時、祇園精舍の鐘の聲にも諸行無常の響があつた。

此處に於て佛敎の因果觀及業の敎說が、時代思潮にくひ入つた。因果觀によつて一つの生命から他の生命へと連絡するものを認め、その連絡には又業の影響を認めたのである。

四

業は世間に云ふ運命に比べる事が出來やう、勿論運命には何等その道德的分子を含まない、然し業には道德的分子を含むで居る、斯の如く運命と業との間には根本的の差異はあるが然も、兩者は何れも人間の現在生活に於けるところの幸、不幸はその現在の道德的生活とは沒交涉であると主張する點に於て、兩者は密接に連絡して居るやうに思はれる。

宿命的な考からすれば、此處に若し善良なる者が苦しめられ惡人が榮えると云ふ事實があるとすれば、それは宿命である然し未來の世に於ては必ず惡人は亡び、善人は榮えると判斷して心の滿足を得るであらう。

而して業を信ずる者の人生觀からすればこれは自

分自身の前世の行爲の結果であり、因果應報であるとしてあきらめる。その苅入るところのものは言て蒔きしところのものなりとは、佛敎的倫理觀である。要するに現世に於ける幸も不幸も、すべてが因果の理法に從ふ必然的のもので人力の如何ともすべくもない事を敎へ、現在の生存は如何にも免かれ得ない宿命であるから、人は此の前に服從する外はない。斯くの如く自己の心境を靜觀し同時に未來の爲に善行を積むの必要を說いたところに、佛敎の慰安と道德的精進の力とは存するのである。

この思想は又終點としての死地を起點に振り代へ、死の彼方に新存な生を求め後方にあつた生と前方に見出した生とを結びつけて、大きな永生に入らうとする情熱となり高まつた。現世を超脫して一切の事象に優越してゐる佛によつて建てられた世界へ導いた。即ち佛敎に於ては現世は惡か善か、幸か不幸、か極樂か地獄かの岐路が開け始めるところで、そこから永遠なる佛の救の國へも導かれるのである。

五

以上述たる如く佛敎は國民生活に新しい活氣を注入し、人生の空乏虛無の重苦しい意識に新しい生命と廣い觀望とを與へたが、そを個人心の來世への憧れに過ぎなかつた。

時に八宗の見學を終へて「日蓮は今時を得たり」と蹶起したのが、末法自覺の日蓮上人であつた。既に時代相も人間性も末法的本領を遺憾なく現して來た、世は末法である、末法には末法相應の敎がある と口を極めて末法の警鐘を亂打した。日蓮上人の末法觀を眺むるならば或は敎學的統一等……多々あるであらうが、今ここには社會的理想に就てのみ見る事とする。

社會的理想とは日蓮上人の宗敎的生命が、特に現實の理想化を强調するところにあつて、像法時代のそれの如く信仰が個人を完成するばかりでなく、又未來の極樂淨土を翹望する丈でなく、信仰に基礎づけた文化が社會を完成して、この娑婆をそのまゝ寂光の淨土たらしむることを意味するのである。日蓮上人以前の佛敎の如く「苅り入るるところのものは蒔きしものなり」となす如き、單なる未來への渴仰でなく、現實に即しての寂光の淨土は日蓮敎學の社會的なる所以であつて、これ正法時代の戒律主義や、像法時代の形式主義を一して末法應時の宗敎として社會的敎化者たるの特色である。

以上述ぶるが如くこれを思想史の過程から觀ても、我が國に於ける佛敎は國民生活に新しい活氣を注入し、人生の空乏虛無の重苦しい意識に、新たなる生命と廣い觀望とを與へ、更に力强い幸福を現世に招き來らさうとする日蓮敎學によつて、日本思想がより豊富な內容を得るに至つたのを認めるのである。

（完）

各地敎信

本多稅下大阪でもラヂオ放送

八月の大阪敎信

△八月一日夜和井田宅にて「實生活と信仰」石井氏「信仰の要義」上田師△五日蓮成寺にて「所感」南氏「水門の三法」光好氏「盂蘭盆に就て」京藤師△二日婦人會「家庭和樂の基礎」京藤師「社會の完敎化」有田師△二十二日堂圓寺にて「情操の涵養」京藤師△九月一日和井田宅にて「盂蘭盆に就て」石井氏「玄正安國の新神」京藤師△五日蓮成寺にて「法華入信の心得」京藤師「汎通草に就て」上田師△十日河村宅「生活の淨化」京藤師△十二日堂圓寺にて「本尊論」石井師「一念三千論」上田師△十九日朝ラヂオ放送「佛敎と修養」本多稅下△蓮成寺にて婦人會「裏町菴子の求法」本多稅下△二十二日堂圓寺にて「日蓮主義の特長」京藤師「順逆兩緣に就て」和井田氏△二十一日「彼岸會に就て」京藤師△二十五日穗永宅にて「正しき信仰」和井田氏「本佛と吾等」京藤師△二十六日平山宅にて「法華經大要」京藤師何れも頗る盛式多大の效果を奏せり。

▲妙敎婦人會例會　十月九日名古屋市敎化會館に於て開催松本堅晴師清水一乘師の講演があつて頗る盛會だつた。

▲自慶會九月例會　名古屋自慶會九月例會は大審正本多日生稅下の來演を得て各工場布敎、行學會例會、公園講演會等を開き何れも多大の成績を示して終了した。

文學士　中川日史著

佛教讀本を讀む

迂學堂昂生

×

佛教は頭の學問で又頭の學問でない。云ひ換えて見ると形而學上の說理であつて、而して說理から生れた行爲乃至生活意識の憧憬でなければならない。だから佛教をロジックのみで片付けて了ふことは矛盾である。

自分は常にお地藏さまへ詣る人々と、堂宇に寵つて佛書に埋つて果てる人々との相違が何故に在るかといふことについて考へさせられてゐる。尠くとも佛教學と信仰行爲は融合して一つものとなつて廻轉を始めねば佛教の名に於て矛盾してゐると常々から考へ、又世相のこの矛盾の現はれを悲しんでゐたものである。

×

然し、この矛盾に依る自分の嘆きが、此處に、今先輩中川日史文學士の「佛教讀本」が著はれたに及んで瞿然として一掃された事は如何に自分を嬉ばし、又感謝の意に滿たさしめたことか。

自分は、この嬉びと、この感謝とを感じたことから筆を起して、この著の內容及びこの著の精神について言及したいと思ふ。

×

この著の卷頭に陸軍大臣宇垣一成閣下は序を寄せて曰く

「由來佛教思想に依つて日本文化が稗益された點は枚擧に遑がない。大項目を數へても十指に餘る。殊に大乘佛教の燦たる光輝は永く世界人類への光明であらねばならない。

現代思想の惡化、輕佻詭激の風に直面する每に自分は佛教の衰頽を嘆く者である。佛教の感化にして眞に徹底してゐたなら、感恩感謝の思想にしても、或は精神文化究竟の哲理にしても、國民間に、より廣く、より深く、より明瞭に理解されて現在斯の如き世相も或は趣を異にしてゐたのではあるまいか。」

と云つてゐるのを見ても、この至高至深の佛教が、過去に於てその一端一尖のみしか、われわれの生活に融合してゐなかつたことが證明されるわけである。

自分たちの生活圈外の高きに佛教は存在してゐて、佛教全體が自分たち生活意識の中にアリバイを示してゐたことが判るではないかこれは恐らく心ある人は誰れも考へてゐたことだらうと思ふ。

×

而して、恐らく中川文學士もこれを考へてゐて、この矛盾を除去しやうとする念願があつたことはこの著「佛教讀本」を觀れば忽ちにして感せられる處である。この念願とこの成就を、自分は嬉ぶ前に先づ中川文學士の爲に嬉ばねばならないと思ふ。

×

その自序にも、自己の念願のある處を披瀝し、更に

「於茲、この小著を公にし、人々に佛教の眞面目を傳へて悅びを共にしたいと思ふのである。もとより紙數に限りがあつて、浩瀚な佛教をこの小著の中に委く收め盡さんは、到底考ふべからざる所である。けれどもでき得る限り簡易平明を旨とし、教理の概略にふれて說いたつもりである。」云々

とその內容に心を用ひたことも遲べてゐる。

×

先づ部を十二門に別け、第一章「非宗教的現代思想」から想を起し第十二章「佛教信仰の歸結」に至るまで宗教的の自覺を呼び、宗教不振と根本原因を說明し、宗教に對する現代人の性格及び、その態

度とその赴む可き佛教を教示し、佛陀の生涯の内外、兩面の經路を詳述し、その依つて生れた佛教の根本精神の核心を解剖してわれらを納得せしめ、その修行、人生に對する考察、集諦、苦諦、道諦、を解說し、佛教信仰の皈結として佛力、法力、信力と三力相合して久遠の慈光につゝまれて自他俱に惠まれた生涯に幸多き生活を營まんことを願つて卷を了るまで、その說くところの至深至高に反してその行ふことの必要容易なることを讀む人をして忽ちに感せしめてゐるのは、蓋し、著者中川文學士の赤誠熱意の齎す處ではあるまいか

×

自分は最後に、字垣陸相がその序の末尾に、この書を揭示して進べに言葉を、こゝに轉載して筆を擱きたい。曰く

「民風作興の點から見ても、國民精神確立の見地から考へても、ゆたかな心の生活を培ふ資料としても、此種の良書の普及は、尙に望ましいことである。夏日綠蔭の榻上に、寒夜孤燈の机邊に、敢て一本を讀書子にお薦めする。」と。（東京市神田區表神保町二）研究館發行　定價一圓）

震災記念講演會

主催京都妙滿寺布敎部

九月一日は吾が國民として忘るゝ事の出來ない關東地方大震災の第四週年である、吾が妙滿寺布敎部では正に意味ある賛んとする社會に對して布敎部全員總出にて京都市民に一大警鐘を亂打す。

「震災への直感」　伊藤寛道師
「震災の敎訓」　萩原日道師
「震災と社會相」　土持真逢師
「震災の寄劍より生ぜし悲劇」　原田日勇師
「東都の驚愕」　藤田玄師
「想ひ起す善惡二正」　豊田通泰師
「震災と人情美」　今井乾章師
「震災に就ての覺悟」　中島存治氏
「情は人の爲ならず」　金光孝碩師
「科學哲學及宗敎」　有田宏道師

以上十名の講師願は藏引にて定め一同何れも十五分間の熱辯に來聽者何れも閉會迄熱心に傾聽した。

▲**廣島敎信**　藝陽廣島を中心として紀野布敎師九月中左の講演をなし、△九月十三日本願寺婦人會「自警自戒の好義」△十六日字品願信會の爲に「日蓮上人御詠に現れたる聖調」△廿二日本門法華宗本遍寺に於て「受持信念の根本義」△廿二、三兩日本願寺に於て「壽量品精要」△廿七日可部布敎所「佛性の顯動」△廿八日本願寺講演會「いろは歌と佛敎精神」△三十日吳海軍々醫部從業員婦人部全員三百名の爲に「同情心の發揮」を何れも盛會裡に講了した。

▲**台中通信**　九月九日、十日、十一日の三日間毎午後正七時より臺北市內觀音公園に於て「現代思想と日蓮主義に就て」△十二日臺北布敎所に於て「龍口御難に就て」松鶴好明

九月京都活動史

秋夜法雨降る

△二日夜本山に於て護正會例會「佛敎の大綱（續）」原田日勇師△八日午後二時より成龍院に於て護正婦人會例會、有田宏道師△八日夜川東本正寺に於て二樂會例會「伸んとするには先づ」土持真逢師「日蓮主義の本領」萩原日道師△九日正行院に於て正行婦人會例會、「法佛に於て」原田日勇師　△十三日午後二時本山に於て宗祖會嚴修後講演「龍口御法難に就て」原田日勇師△十四日夜本山に於て京都立正會九月例會を開く「日蓮主義と國民道德」杉村勇次郎氏「思想の歸結と法華經」原田日勇師△十八日夜本山に於て久方振に本多貴下の御親敎ありたり、午後四時半より法華經講會主催にて法華經講演續いて「佛敎と應用」本多日生貴下△廿一日本山に於て彼岸初日法要修行後講演「彼岸の意義」墨顯玄師△廿二日午後二時より久遠寺に於て彼岸會修行後說敎「法食に就て」原田日勇師△廿三日川東本正寺に於て彼岸法要說敎「心の變轉」墨顯玄師△廿四日本山に於て彼岸中日嚴修後說敎「妙莊嚴玉泉」原田日勇師△廿五日大慈院に於て彼岸法要後說敎「功德と回向」土持真逢師△廿七日本山に於て彼岸結日法要　說敎「人心修養の必要」金光孝碩師△廿八日本山に於て開山會修行後講演「力」有田宏道師△十九日東加茂正道會に於て講演「信仰に就て」中島孝治氏「本佛の依相」金光孝碩師「日蓮主義」萩原日道師△八月八日夜川東本正寺に於て二樂會例會「信仰人の道程」村越知完師「法華經主義」細野長雄閣下△廿一日川東本正寺に於て盆會修行後說敎「信仰の啓發」金光孝碩師。

日蓮敎義講習會

大盛會で終了

十月七日より十一日まで京都寺町二條妙滿寺に於て顯本法華宗西部講習會主催となり、日蓮敎義講習會を開き、本多、井村兩大僧正を始め、青柳工學博士、佐野警視、小倉京都府社會課主事などを講師として本宗の僧侶を始め有志、學生など多數を講習員として頗る盛會裡に多大の効果を收めて終了したが、當講習會に於ける各講師の御講題は左の如き有益なものばかりであつた。

「佛敎の根本と應用」大僧正　本多日生貴下
「日什聖人開宗の事情と日蓮門下統合の將來」　管長大僧正　井村日成貴下
「人生と修養」　工學博士　青柳榮司氏
「不良少年に就て」　川崎警察署長警視　佐野一男氏
「社會事業問題」　京都府社會課主事　小倉恒司氏

▲**金澤敎信**　九月四日本長寺に於て「壽量品を開却せる失態」能仁一十師△十二立正寺に於て「釋尊博」松田常敎師△十四日本長寺に於て「本佛釋尊の顯本」能仁一十師△十五日本覺寺に於て「龍口法難」能仁一十師△二十一日より二十八日まで毎夜本長寺に「於て連續講話」「日蓮上人の敎」能仁一十師△二十九日河合氏宅にて「追善供養の意義」能仁一十師。

目次

一念信解と初隨喜……本多日生
聖訓摘要……本多日生
轉氣療法……醫學博士 石田誠
意話 酒井小太郎定隆……長谷川義一
記事……長谷川義一

第三十年十二月號

社寺建築設計監督及臺灣檜材の安價提供

（三年以上水蓄乾燥材）

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

（充分なる水蓄乾燥をなしたる臺檜最も優良なるも水蓄不充分なる臺檜は于鋸狂ひ等の缺陷多きものであります）

臺灣檜材ノ六大特徴

一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅靱
五、理整鉋木
六、木高雅色

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
（明治神宮外苑內日本青年館正門前）
社寺工務所
（電話青山六〇二八番）

神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所
（電話二二三〇番）

大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所
（電話西三二二四番）

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

大正十五年十一月十一日印刷納本
大正十五年十一月十一日發行（第三百八十號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人 國友日斌
印刷人 鈴木日雄
名古屋市東區千種町字五反田五二番地
印刷所 三益社

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 統一發行所
振替東京五一〇七一番

名古屋市東區田代町字城山七十七番地
編輯所 統一編輯局
電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

日蓮上人遺蹟會 部